

---

# 光射す方へ・・・【東方小説】

御音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光射す方へ・・・【東方小説】

### 【Zコード】

N1976BA

### 【作者名】

御音

### 【あらすじ】

一期一会を大切にする大学生、田口啓祐。  
人の出会いは時に華麗、時に残酷。  
その人の人生を大きく変えることもある。  
共に辛い思いをし、共に惹かれ合う。  
全ての始まりは出会い、今ここに人生の始まりが訪れる。

## 第一話 「一期一会」

人との出会いは一期一会。

あなたと出会えたのも奇跡かもしけない、実は運命だったのかもしない。

ただ、これだけは言える。

”あなたと出会えて本当に良かった”と・・・

カーテンから差し込む光、部屋中に鳴り響くアラームの音。

小鳥の囀り・・・は流石に無いか・・・

俺は寝不足で疲れ切った体をゆっくりと起こす。

誰もいない殺風景な部屋、真ん中に机がポツリと置かれている。このアパートには部屋が3つあり、リビング兼寝室と物置、そして空き部屋にしている。

ブー、ブー・・・

机に置いてある携帯が鳴り響く。

俺は背中に思い齿でも背負っているかのような速度で携帯を手に取つた。

一つ折りの携帯を開き、その画面に表示されている項目に目をやる。

”おはよう諸君！本日も朝から晴天で気持ちが良いな！”

今日は特別講義があるらしい、各自筆記用具とメモを取れる物を用意することだそ�だ！

といふことで俺は支度をしなければな。また大学で会おう。”

見るなり神速の如く携帯を閉じる。

相変わらずのテンションはメールにまで及んでいるらしい。そう思いつつもこういうお知らせには感謝している。俺は普段からメモを取らないからな。

ベッドから降り洗面所へ向かう。

青色の歯ブラシを手に取り歯を磨く。

当たり前のことだがそれでいい。

「…………眠い」

歯を磨き終え俺はポソリと呟く。

言つたところで眠気が覚めるわけではないのだが、寒いときに寒いと言つてしまふようなものだ。

寝癖をドライヤーで整え、今日着ていく服をタンスからあさる。

「これは昨日と似てるし……これは、んー……」

大したセンスも無いのに悩みに悩む。

結局選んだのは無難な感じのだった。

それを急いで着込み、大学へ持っていく物をカバンに入れ始める。

朝ご飯は食べない……そもそも食べている時間が残されていない。支度を済ませ、玄関に放りっぱなしの靴を急いで履く。

「…………行つてきます」

電車を乗り継いで大学前に到着する。

朝の通勤、通学ラッシュ時ほど電車が地獄に思えることはないだろう。

服のシワを軽く伸ばしながら大学へ歩く。

見知った顔もあれば見知らぬ顔もある。

当然だろう、今はまだ5月。

一ヶ月で新入生全員の顔を覚えるほど俺には記憶力は無い。

「あの子は あの子は。あんこは・・・って、あんこってなんだ？」

隣でふつぶつと呟く馬鹿は無視するのが一番だと知っている。俺は大学の方を向きながら静かに足を進める。

「俺の心は真っ黒なのに空は青い・・・その清々しさを少しは分けてくれよ・・・」

「なら分けてあげよっか？」

後ろからひょっこりと声をかけられる。

河野美佐子、中学までと大学からの同級生だ。

未だに後ろでブツブツ呟いている馬鹿と3人でよく遊ぶ仲間だ。

「今日も馬鹿は平常運転なの？」

見ての通りだとジエスチャーで示す。

ただ指で指すだけで分かつてくれるほど日常的な風景と化したのだろづ。

馬鹿は放つておき、俺は美佐子と2人で大学へ向かうこととした。こうして誰かと共にいるということは良いものだ。

1人ほど辛くて孤独なものはないからな・・・

「ほら、また暗い顔してる」

美佐子に言われて自ら頬を抓つてみる。  
確かに暗い顔をしていたのかもしれない・・・でも仕方がないことなんだ。

俺は深く深呼吸をし、ふつと体に力を入れた。

「うん、それでこそ啓祐だね！やつぱりしゃつきつとしてる方が良いと思ひよ」

こづして話せる相手がいることに感謝したい。

俺の座右の目は一期一會。人との出会い、関わりは一瞬たりとも大事にしようと思がけている。

「もうすぐ着くよー先行ってるねー！」

そう言つて走つていく美佐子。

俺はその後ろ姿をボーと眺めつつ、トボトボと大学へ歩み始める。この大学に入学して早2年が経つ。

最初こそ不安で押し潰されそうだったが、今の生活を送っているのは美佐子と慶一のおかげと言つても過言では無い。

人の出会いは大切、そして出会えた人に感謝。

俺は少しだけ顔を上げ、大学の門をくぐつた。

ここは田の光が届かない地底。  
地上から深く深く、まるで避けられる、避けているかのようにでき  
た街。

地底の繁華街、そして地靈殿。

妖怪ですら恐れる少女、その妹。

八咫鳥、猫耳の妖怪。

数々の人間とは違った生き物が住む世界、幻想郷。

「でねでね、あの巫女がそんなことをしてたの」

白髪の少女が紫髪の少女に楽しそうに話しかける。  
それを横目で聞く紫髪の少女。

回りには数々のペットがわいわいと騒いでいる。

ここが元地獄だなんて誰が思うだろ？

少なくとも過去を知らない人物はそうは思わないだろう。

「・・・」  
「出掛けの？」

「出掛けの？」

ここと呼ばれる少女はまるで子供のよつに行先を訪ねる。  
紫髪の少女はそれを軽くあしらい、スウと部屋を出て行つて  
しまつた。

「そう、まるでもう戻つてこないかのよつて。」

「「こし様、れとつ様はどうひらく？」

「分からない。お姉ちゃん何も教えてくれなかつたもん」

「いじけた子供のようにソファーに寝そべる「こし」。

隣では猫耳の少女がちょこんと座つてゐる。

「火焰猫燐、地靈に住む妖怪」。

その容姿から誰が妖怪と思うだらうか？しかし妖怪といつて同じに変わりはない。

「せとつ様帰つてくるのでしょ「つかね？」

「お燐は首を傾げながらせつ咳いた。

「彼女も薄々気になつてゐるのだろう、せとつはもう帰つてこないのではないかと。」

「いしだつて気になつてないわけではない。

「帰つてこな」ときはその時だよ。あいつが現れたらそれだけの事態つてこともね」

特別講義だからと期待していたのが馬鹿だった。

大した内容でもなく、自分が思う将来にはとても役立つとは思えな

かつた。

それでもメモは取らなければならない。レポートという地獄が待つているのだから。

「だるいつたらありやしねえぜ・・・啓祐、終わつたらカラオケでも行かないか?」

慶一の誘いに断つたことは無い。  
俺のバイトのシフトに合わせて遊びに誘つてくれる優しい奴だからだ。

勿論、美佐子も誘つつもりなのだろう。  
いつも3人で遊び、3人で笑い合う。  
これほど楽しい人生が他にあるのだろうか?  
少なくとも俺はそんなものは知らない。

「うーん・・・悪いけど今日はバスするよ」

断つたことは無いのだが、今日だけは何となく乗り気じゃなかつた。  
慶一は「そうか」とだけ言い残し講義室を出て行つた。  
明日もバイトは休みなので明日にしようと俺は決めつけ、ノートを抱え講義室を出る。

今日の帰りは1人。そう、何となく決めたのが事の始まり。

慶一と美佐子に別れを告げ、俺は1人で帰路に就く。  
駅までの道のりを歩き、がやがやと鳴り響く商店街を通り過ぎる。  
運良く駅に着くとすぐに電車が到着した。

時間帯が少しずれているらしく、車内はガラッと空いていた。  
椅子の端に座り、乗り換える駅まで寝ることにした。  
少しだけ・・・少しだけ眠ることに・・・

（次は 駅へ、駅で御座います）

車内に響くアナウンスで目が覚める。  
どうやら目的の駅に着くらしい。

慌ててカバンを掴み、扉の前に移動する。  
扉が開けば外に出、向かいのホームで電車を待つ。

毎日繰り返していれば間違えることは殆ど無い。  
電車が来るまで少しだけ時間がある。

ブー、ブー・・・

ポケットに入れてある携帯が震えだす。

誰だろうと携帯を出し、二つ折り状態の携帯を開いた。

画面には美佐子の文字、そう、大学の同級生河野美佐子からのメールだった。

”遊び断るなんて珍しいね

明日もバイト無いんでしょ？明日は3人で遊ぼうね”

ありがとうとだけ打ち込み返信する。

いちいち気を使ってメールを送ってくれるのだから無視は失礼だ。  
メールの文面を見ながら感謝しつつ、ホームに到着した電車に乗り

込む。

自宅まで後10分程度だろう・・・帰れば晩御飯の支度が待つている。

といつても冷凍食品を温めるだけなのだが・・・

電車を降りれば自宅までは後少し。

少しの道のりがとても長く感じるが、歩かなければ自宅に着けない。

仕方なくトボトボと足を進める。

カーブミラーの無い小さな交差点を過ぎ、自宅のアパートが見え始める。

アパートの前、トの交差点に差し掛かる。

俺は座右の目が一期一会だと言った。

一期一会とはとても大切で意味のある言葉だ。

それと同時に恐ろしいものもある。

人との出会いは必ずしも良いことばかりではない。

自分にとつて不都合な出会いもあるだろう。

それでも俺は一期一会を大切にし続ける。

そう、こうして何気に帰ってきた今も・・・

ドンッ！

誰かと体がぶつかる。

少しして顔を上げ、ぶつかった相手を視界に捉える。

これが全ての始まり、俺の人生を180度変える出来事の始まり。紫髪の少女との出会いでも会った。

「…………変…………ですか？」

彼女は「」う言い放った。俺は何も言つていないので。

「別に…………変ではないですよ。むしろ…………似合つてますよ」

何氣に言つたこの言葉が始まりだつた。

何に対しても似合つていると言つたのかは定かではない、服装かもしないし髪型かもしねりない。

しかし、彼女には全てが簡抜けだつた。

俺が口から言わざとも全てを分かつており、言つ必要が無かつた。

「…………こぎなりで失礼なのは承知の上ですが…………その…………泊めてもうつてもよろしいでしょつか？」

人生が変わった瞬間だつた。

## 第一話 「事の始まり」

大学での講義が終わり帰宅した。

いつもと変わらぬ風景の部屋。

冷凍庫から晩飯用のお好み焼きを2つ取り出し、皿に乗せて温める。俺は普段から大食いではない。それでは何故2つも温めているのか。理由は簡単だ、部屋を見てもらえればすぐに分かる。

「（・・・・・何が起こったのだろうな）」

内心の俺はとても困惑している。

別に一人暮らしだから1人増えようがどうかこととは無いのだが・・・

部屋の中心、そこに置かれた机の前にチョコソと座る紫髪の少女。どう見ても20歳にも満たない少女なのだが・・・

「お好み焼きとは何でしようか・・・」

何も聞く前に聞かなくともと焦つてしまつ。

この少女、名は古明地さとりと名乗つた。

俺の思うことを俺自身が言つ前に言われてしまつ。まるで俺の心を読んでいるかのようだ。

不思議を超えた不思議な少女だと俺は思つ。

先ほどアパートの前の曲がり角でぶつかつた後、突如泊めてほしいと言ひ出した。

話しを聞く限りじゃ別世界らしき場所から來たらしい。

知り合いなどいるはずもなく、たまたま居合わせたのが俺だったの俺に頼んだ、そららしい。

本当かどうかはさて置き、流石に幼い少女を外に一人でいさせるわ

けにはいかない。

変な誤解をされては困るが、そこまで鬼だとは自分では思つてないつもりだ。

「大阪の名物ですか……一度食べてみたいですね……」

答える必要が無いのはとても楽なのが……少し怖いぐらいだ。

彼女、古明地さとりは何でも先に口走る。

俺の考え、思考、全てを読み取り全てを悟つてている。

そう、悟り。

「…………さとりさん、だけか」

「はい。古明地さとりです」

こうして稀に会話が成り立つ時もあつたりする。

彼女に対してもいくつもの……口が暮れても終わらぬほど質問があると思う。

全部をぶつけていては時間が足りない、それに彼女にも失礼だらう。俺は手短に、しかし重要な部分だけを再度質問として聞くことにした。

「まずはその幻想郷といつ場所について知りたいかな」

彼女が言つには幻想郷は近くて遠い世界らしい。

らしいというのはやはり俺自身が完全に信じていかないから。

見たことも聞いたこともない世界から来たなんて誰も信じないだろう。

そしてその世界には人間以外の生物、妖怪や吸血鬼、果ては神まで存在するらしい。

本当に幻想郷が存在するならば、これほどの世界を搖るがす事象は無いだろうな。

「そして私は幻想郷、その地底にある地靈殿という場所に住んでいました。こうして外界にいる原因は分かりませんが・・・」

さとうはそう説明する。ぎこちなく。

喋り方 자체にはまったく問題は無い、むしろ丁重かつ親切な説明だと思う。

ただ、視線がチラチラと移動している。定まっていない。

まるで緊張している、オドオドしているかのようだ。

「それと、さとうさん自身についてなんだけど・・・」

ビクッときのりの体が震える。

まるで怖がるように、トラウマが蘇っているかのように。

その目は極限にまで潤んでおり、今にも涙の粒が零れそうな脆い瞳。変わった人だなと思いつつ、俺は2つ目の質問を投げかけた。

「とりあえず年齢だけ教えてもらつていいかな?失礼なのは分かってるけど知つておかないと色々と大変なんですか」

「ね、・・・年齢ですか・・・」

拍子抜けしたような表情でこちらを見据えるさとう。

やつとのことで視線が合つたと思えば、今度は困った表情をする。感情が顔に出る人なのだろうか・・・

「年齢は・・・その・・・」

実は童顔で20歳を超えているから言つのが恥ずかしいのか。  
それとも女性として年齢を暴露するのが恥ずかしいのか・・・  
何れにしてもこれ以上聞くのは心が痛んできた。  
俺は困惑し、顔が紅潮しているさとりにこう言った。

「まあ年齢はいいよ。ごめんね、失礼なこと聞いちゃって」

そう言つて温めが終わつて冷めているであろうお好み焼きを再び温める。

これは俺の直感かもしだいが・・・さとりは人と関わるのが苦手なのかもしれない。

それ以前に、幻想郷がどういう場所なのか俺には分からぬ。  
もしかしたらさとりは妖怪に囲まれて過ごしていたのかもしれない。  
少なくとも彼女は人間なのだろうが・・・

時は数時間進んだのだろう。

外は既に街灯の明かりのみとなつていた。

まだ季節が春なので虫もそういうわけもなく、心地良い夜風が網戸

から入り込んでくる。

部屋にはテレビから流れる音声が響いており、そのテレビに釘付けになるさとりもいる。

普段は俺以外いないこの部屋に誰かがいるというのはとても違和感がある。

かといつて追い出すというわけでもない。何もしないならいてもらつても構わない。

・・・馬鹿を泊めたら色々とされそうで嫌なのだが。

「（…………不思議といえば不思議なんだけどな…………）」

彼女は何かを隠している。

その隠し事が何かは分からぬ、ただ何かを隠しているのは事実だろう。

オドオドとした雰囲気がそれを物語つてゐるし、まるで人と関わるのを避けるかのような感じもそうだ。

彼女は人が嫌いなのだろうか……俺には分からぬが。

「さとりさん」

「は、はい……何でしようか……」

この反応、驚いているというよりかは怖がつてゐるようだ。  
考へても埒は明かないのでとりあえず流すことにする。

「何か困つたことがあつたら言つてね。俺も出来ることはするから」

会つて半日すら経つていない相手に何故ここまで優しく接するのか。  
単なる社交辞令なのかもしれない。

それか……俺の過去のせいなのかもしれない。

とにかく、さとりがいる間は不自由をしないようにしなければ。

「ありがとうございます……」

不器用な笑みがほんの僅かだ漏れる。

まるで頬の筋肉が引き攣つたような笑みだつたが、本人なりに頑張つたのかもしれない。

それに……何だか嬉しい。

「どうあえずひとつせんの寝る部屋だけだ……ほか部屋が一つあるんだ。ナニコレのベッド持つていくからや」でいいかな？」

「え、あ……でも……あなたのベッドじゅ……」

オドオドするセツだが、俺は強引に話しを進める。  
「どうあえずベッドは持つていくことにした。押し入れに布団があるからベッドが無くても寝れる。

問題は服やその他もうもろだ。

俺は男、ましてや女性とお付き合いなんてしたことがない。

美佐子は友達だし、慶一は論外に等しい。

「んー……そうだ

俺は閃いたように頷く。

しかし、出会って間もない彼女と買い物に行くなんていいのだろうか。

彼女は人との関わりを極端に嫌っているみたいだし……  
「どうあえず聞くだけ聞いてみる」と決意した。

「明日講義が終わったらセツとせんの服とか日用品を買いに行こうと思つんだ。どうかな?」

お金についてはあまり追及してほしくない。いちいち気にしてもうつては埒が明かないからな。

セツは困った表情をするも、無くてはならない物もあるのだから。僅かだが首を縦に「クリと振つてくれた。

「うん。じゃあ明日の夕方は近くのデパートにでも行こうか

そう言つて俺は折りたたみの出来るベッドを部屋から部屋へと運び始める。

キャスターがついているので移動はとても楽で便利だ。  
さとりはベッドを運ぶ俺をじつと見つめ、視線を合わせようとフイツと逸らしてしまつ。

人が嫌いなのか、恥ずかしがり屋なのか・・・よく分からぬ。

アパート前の道は街灯と月明かりで照らされている。  
網戸から入り込む夜風に当たりつつ、俺は缶チューハイの蓋を開けた。

静かになつた室内で1人酒を飲む。

「・・・・・はあ」

何だか疲れた一日だつた。

どこから来たのかも分からぬ少女、古明地さとり。  
急に泊めてと言わたときこそ驚いたが、今となつては自然になりつつある。まだ半日も経つてないが。  
人間の適応力にはつくづく驚かされる。

「これからどうなるんだろうな・・・」

誰も答えない、1人しかいないのだから。

そんな中でも呟いてしまう。やはり不安はある。

日本に住む以上、住民票や税など色々と面倒な部分がある。

さとりはそういう物には登録なんてしていらないだろう。  
もし追及されたらどう答えたらいいか・・・まったく分からぬ。  
しかし、いちいち氣にしていては骨が折れる。

「いいよな別に・・・仕方ないもんな」

そう思いチューハイを一口、一口飲む。

度数の低いチューハイなので明日の講義には問題は無い。  
俺はそれを飲み干し、臨時に敷いた布団に身を包めた。  
そして静かに目を閉じる。

また明日がやって来る。いつもと変わらぬ明日が・・・

## 第二話 「感情の意味」

薄暗い部屋の中、一人ベッドに横たわるセトリ。

妖怪には寝る必要がない、睡眠などとる必要がない。

彼女はこのまま寝なぐても生きられる。妖怪なのだから。

「（・・・理解、できません・・・）」

彼女は人間が大嫌いであり、人間も彼女を心底恐れている。自らの心を読む力いよって人間はおろか、妖怪にまで恐れられるようになる。

私を好き好んでくれるのは動物達、そう、地霊のペットだけ。そう思っていた・・・

「（あの人間は・・・）」

少しだけ心を読むのをやめてみた。

いつもなら心を読み、相手の思考を先に暴露することで脅かしたりしていた。

しかし、相手が何を言い出すのか分からなければ相応のスリルのうなものがある。

人間が嫌いと/orいともあつて・・・

「（・・・・・明日が・・・・楽しみです）」

人間との初めてであるう交流。

さとりの胸はまるで遠足前の子供のように高鳴っていた。

そう、体が火照り、顔が紅潮し・・・

それはまるで恋する乙女のように。

しかし、さとり自身はそれに気づかない、分からない。この感情が後に残酷な未来を招くといふことも……。

朝田は容赦なく俺の体を襲う。

毎日のようすに眠い体を起こし、洗面所へ向かつ。

朝、飯の良い匂いが漂つた、俺は眠い目を擦つて歯を磨かねばじめ……。

・・・・・

「（・・・良い匂い？）

ふと疑問が頭に浮かぶ。

それと同時に、誰が何をしているのかある程度予測がつく。

俺は歯を磨き終え、すぐさま台所へ向かつた。

湯気がもくもくと上がる白いほんに味噌汁。

とろとろ半熟のオムレツ、そして良い感じに焼けているソーセージ。

一体誰が作ったのだろうか。答えは一つしかない。

「えひり・・・さん？」

まじまじと「ン」と睨めっこをするたとり。

Hプロンこそつけていないが、その姿は初々しい夫婦の妻のよう。さとうに料理スキルがあったのかと感心し、早く食べてみたいという衝動に押されてしまう。

「あ、おはようございます・・・その・・・よかつたら、どうぞ・・・

・

よかつたらなんて勿体無い、俺はすぐさま箸を取り出した手料理を食べ始める。

朝ご飯なんて滅多に食べない。食べるといつてもパンかご飯だけだ。たまに早起きをしれみればこんなに美味しい朝ご飯が食べれるなんて・・・俺は何て幸せ者なのだろうか。

あまりの美味に俺は周りが見えなくなっていたのかもしれない。さとりさんがお茶を持ってくれたその時・・・

ガシャンツッ！・・・・・・・・・

足を滑らせたのか、お茶の入ったコップを盛大にまき散らすぞと。そして俺曰掛けて飛んでくる。

勿論、気付くのに数秒を要した俺に回避の余地など残されていたのだろうか・・・ない。

「つまつまっ！」

回避が出来ないなら受け止めるしかない。

俺は無理に体を捻りさとりを受け止めた。

受け止めた反動で椅子がひっくり返り、俺もさとりも床へ投げだされる。

「痛い・・・そして柔らかい・・・」

後頭部を床に強打したのか、じんじんと痛みが増してくる。

そして右手、俺の右手が柔らかい物をふにっと掴んでいる。

最初こそ理解できなかつたものの、徐々に何を掴んでいるのかが鮮明になつてくる。

と、同時に脳裏に危険の一文が浮かぶ。

バシンツツ！！

「おはよう。何だか今日顔色悪くない？」

となりで美佐子が話しかけてくる。

顔色が悪いも何も・・・左の頬を見てもうえは全てが分かる  
真っ赤に腫れ上がり、その腫れた後は誰かの右手のよう。

「夫婦喧嘩でもしたの？」

「誰が夫婦だ喧嘩だ・・・そりや俺だつて悪いさ。非は認める。でもあんなに思いつきり殴らなくてもさ・・・」

腫れ上がる左頬をさすりながら大学の門をくぐる。

居残りですることもそこまではないだろ？

殆ど言えは井上教授が面倒みてくれたらしいと

「じゃあね。私先に行くから」

そう言つて先に講義室へ向かう美佐子。

いつもの如く、その背中をボーと見つめていた。

後ろでは「れまたい」の如く黒鹿かふ(ふ)と呼む、そしてメアードを聞いては断られるの繰り返しだった。

・・・ 今日も平和な一日になりますよ。」

講義が終われば俺は一直線に自宅へ向かう。  
美佐子と慶一には事前に断りを入れておいた。  
最近付き合いが悪いなどどうこう言っていたが、そこは何とか分か  
つてもうらうた。

俺は珍しい私用の為に帰路を急ぐ。

「つたぐ・・・何でこんな時に限つて電車は延着、しかも満員なん  
だよ・・・」

乗車率120%の電車に揺られよつやく自宅前まで辿り着く。  
部屋の明かりはまだついてる・・・そとつは準備しているだらう  
か?

俺は慌てて階段を上りドアノブに手を差し伸べた。

「ただいま・・・れとつせん?」

返事がない。

そもそもただいまといふ単語を発したのが何年ぶりだらうか・・・  
靴を脱ぎ、室内をキヨロキヨロと见回す。  
誰もいない・・・するととある一室が頭に浮かぶ。  
まったくと黙つていいほど使っていなかつた空き部屋。  
今となつてはひとりの寝室。そこを覗くこと

「・・・・・・何と・・・」

スースーと寝息を立てた。いつの姿がそこにある。

疲れて寝てしまつたのだろうか・・・起きるべきか悩む。

といあえず軽く体を揺さぶつてみた、が、起きる様子は全く無い。ビービービービーと迷つてゐる最中、わざわざ「何かを口にする。

何を言つてゐるのかは分からぬ。ただ、はつきりと聞き取れた部分だけある。

それを聞くなり俺の心中はショイクされたかのよつてちぢめやべぢやになる。

いや、俺だけじゃない、それに一番辛いのはせとつり自身だ。

「・・・あつ・・・私寝ちゃつた・・・」

目が覚めるなり慌てて起き上がる。いつ。

突然起き上がつたせいで眩暈がしたのか、ふらつと体を揺らす。慌ててそれを受け止め、軽く背中をさすつてやる。

「す、すみません・・・お出かけの方は・・・」

「ん、ああ。行つたか。さとつさんは用意大丈夫?」

「クリと頷く。いつ。

俺は車のキーと家の鍵をポケットに入れ、靴を履く。

施錠を確認し、アパート裏に止めある愛車の下へ急ぐ。

ここ数日乗つていなかつたせいか、少し埃を被つたような感じがあるが・・・

「これば・・・」

巨大な鉄の塊を前に啞然とするさとり。

話しによれば幻想郷は技術がかなり遅れているらしい。

車というものを見るのが初めてなら驚いても仕方がないだろう。

鍵のボタンを押し車の鍵を開ける。

助手席の扉を開け、こちらから乗つてくださいと説明をする。

恐る恐る乗り込むさとりを見て少しばかり笑みが零れてしまう。

「さてと、行こうか。」

キーを差し、エンジンを始動させる。

アクセルを踏み、軽快に鉄の塊は動き始めた。

目的地のデパートへと進みだす。

そう、もしかしたら初めての異性とのお出かけかもしない。

そう思つと胸が高鳴るが、これはあくまでもさとうさんの買い物に付き合つだけ。

俺は何を考えているんだと頭を座席にぶつける。

「・・・何をしているのですか？」

「あ、いや・・・何でもないよ。デパートまで少しだけ時間かかるから。眠いなら寝てもいいよ」

信号が青になつたと同時にアクセルを踏む。  
車窓から流れる景色が珍しいのか、さとりはずつと外を向いたままだ。

俺はその姿が子供にしか見えず、またもや笑みを零してしまつ。  
我ながらこの状況を楽しんでいるのかもしれない。

そして、それと同時にこれが終わつてほしくないという感情があつたのかもしれない。

視線を前に戻したさとりの手を無意識に掴んでしまう。

幼く華奢な手だが、人間独特の温かみを感じる。

思わずぎゅっと握ってしまう。

何をしているんだと自分に言い聞かせ手を離すが、温もりだけは逃げることはなかつた。

さとりは驚いた表情でこちらを見つめている。無理もないだらつ。

「あつと・・・」、「めん」

青信号になつたと同時、慌てて謝る。

車内に気まずいのか、それとも困惑したものなのか、そんな空気が漂つている。

結局、デパートに着くまで終始無言状態だつた。

そう・・・懷いてはならない感情。

人間と妖怪の恋などあつてはならないこと。

さとりを妖怪と知らない啓祐には到底理解のできないこと。

「あの・・・」

デパートの駐車場に車を止め、横からさとりが話しかけてくる。  
とても困惑した表情、無理もないか・・・  
と、思つていた俺の推測は大きく外れた。

「あなたのこと、何と呼べばいいのでしようか・・・」

今思つたが、俺は自分の名前をさとりに教えていなかつた。  
言われて初めて気付いたが、もし言わなければずっと名無しの状態でいくつもりだつたのだろうか・・・

「あー・・・啓祐でも何でもいいよ」

「それじゃ・・・啓祐さん、で・・・」

顔を紅潮させるさとり。

それを横目で見つつ、シートベルトを外す。

デパートには仕事終えた父親と共に歩く家族連れ。まだ初々しい新婚夫婦。

様々な人達が集う中、俺とさとりも店内へ歩き出す。

春の夕日が差し込む中、丁度良い温度の店内に入る。デパートだけあって店舗の数はかなり多い。

えっと、ファッショングループは・・・4階か。

## 第四話 「禁断の恋」

結論から言おう・・・可愛この一言に死せる。

俺とさとうは4階にあるファッショントーナーへと足を運んでいた。様々な洋服店が並ぶ中、さとりが興味津々に見つめている店がある。可愛い子供服から大人っぽいクールな女性用の服が所狭しと並ぶ店。主に女性の服を扱っているらしい。

「・・・見るだけ見てみるか？」

不意に話しかけられ驚いたのか、さとうは体を大きく震わせた。しかし、それ以上に興味があつたのか、「クリと小さく頷いて店内へ入つていった。

それを見届けた俺は壁際に設置されていたベンチに腰をかける。普段こういう場所に訪れることが無く、慣れない場所に戸惑つているのが現状だ。

辺りをキヨロキヨロと見回しつつ小さくため息をつく。

さとうは店内でおすすめの服でも着させてもらつていいのかな？

「デパートか・・・」

小さくボソリと呟く。

デパートと言えば家族連れが目立つのが普通だらう。

現に俺の目の前を家族連れが数多く通り過ぎている。

お菓子を強請る子供、あれやこれを見て回る婦人。しかし、これだけは言える。皆が楽しそうだと。

「あ、啓祐……せん……」

ボーとしている俺に声をかけるさとじ。

店内物色が終わったのかと思い顔を上げてみた。そこにはあのフリルのついた服のさとじはいなく、ただただ可愛らしい少女がいた。

色合いこそ元着た服と同じだが、少しアレンジを加えるだけで印象はガラッと変わってしまう。

思わず見惚れる俺に店員が声をかける。

「とてもお似合いでありますか?」

「え、ああ……いや……うん、似合つてゐる……」

不器用に返事をし、店員は一〇二〇と店内へ戻つていく。  
さとりはこの先どうしたらいいのか分からず困惑つてゐるようだが・  
・

「……その服買つか?」

その一言に「クンと頷いた。

買つと決まれば服を着替え、レジへ持つていく。  
会計を済ませれば服を丁重に紙袋に入れてもらひ。  
値段なんて気にしなくていい。そもそもひとつのみでいた世界と  
ここでは通貨が違うらしいからな。

「よかつたな……似合つ服見つかって」

さとりは顔を俯けたまま・・・ただ紅潮させた顔を見られたくないだけなのか分からないが。

次に向かったのは日用品コーナー。

普通に必要な物として洗面用具など買わなければならぬ。

「やわらかめでいいかな？」

「はい・・・一番柔らかいので・・・」

「どこかわからないがやわらかめと表示された歯ブラシをカゴに入れる。

歯磨き粉にタオルや切れかけのシャンプーなど・・・会計を済まし、ついでファッショングループへ舞い戻る。

「寝間着、いるよね？」

そつ言つてまた先ほどと同じ店内に入る。

寝間着と言つてもスウェットやジヤージみいたいなものだが。そういう類の服が並べられている場所へ移動し、その中から似合いそうなのを選んでみる。

さとりも自分で選んでいるようだが中々定まらないらしい。無理も無い、俺も人の事を言えないが慣れない場所ではどうしても躊躇してしまう。

「んー・・・また店員さんに選んでもらひ?」

「クリと頷いたさとりを確認し、どこかにいるであろう店員を呼びに行く。

そして俺は再びベンチへ・・・のベンチが何となく落ち着く。

真横にあつた自販機でコーヒーを買い暇つぶとして飲み始める。買い物とはこれほどまでに楽しいものだつただろうか。

少なくとも俺の記憶にそんなものはない。

無くて当たり前だろう・・・

そんなネガティブな思考を何とか跳ね除け、再びこちらへやつて来たさとりを見て見惚れてしまうのであつた。

デパートでの買い物を終え自宅に帰つてきた。

外は既に日が暮れ、街灯と月明かりに照らされるのみとなつた。

晩御飯は珍しく冷凍食品から脱した。

デパートの食品売り場で安売りしていた鶏肉を買い占め、今現在から揚げとして調理している。

熱した油の中に投入すれば後は上がるのを待ちつつクルクルと肉を混ぜればいい。

「から揚げって言つんですよね？」

「うん。美味しいよきっと」

自らの料理に自らが美味しいと言つのは少々抵抗があるが、これはあくまでもから揚げが美味しいという意味だ。

少しの時を過ごし、カラッと揚がつたから揚げをペーパーを敷いた皿に乗せていく。

無駄な脂が徐々に吸い取られていく。これを吸い取らないまま吃べるのは流石に無理がある。

「それじゃ食べよっか

机にから揚げ、白ご飯と並べていく。

今日買つたばかりの箸を握るさとりの姿は本当に子供ものよつだ。  
そして向かい合わせに座り、

「「いただきます」」

の合図で食べ始めた。

一口食べ、我ながらいい出来だと舌鼓を打つた。

晩御飯を食べ終え、隣り合わせに座りながらテレビを見ている。  
お笑い芸人が持ちネタを披露する番組なのだが、正直大半がごり押しのようであつまらない。

中には心底笑わせてくれる芸人もいるのだが・・・

「あ、・・・少し席を離れますね」

そう言つて奥へ行くさとり。

俺は大して気に留めずにテレビを見ていた。

つまらない芸人がつまらない芸を披露する・・・これも世の理なのだろうか・・・

「あ、おかえり」

数分して戻つてきたさとりは隣にひょいんと座る。

トイレにては早かつたし、手でも洗つてきたのだろ。先ほどと同じように隣り合わせに座りながらテレビを見る。同じようにならぬのだが・・・どこか違う。そつ、服装ががらつと変わつていた。

「着替えたの？」

と、聞え、

「はい・・・寝るときに着る物なので・・・」

と、返事が返つてくる。

あまりに似合つ過ぎてこの為に田が合わせ辛い。

可愛いと面と向かつて言ふのはだが、生憎俺にそんな度胸と根性は無かつた。

「その・・・似合つて、ますか・・・？」

そのきつひなに質問に一枚上回るきつひなで答えた。

「・・・似合つて・・・んじゃないかな。つん・・・こと思つよ」

きつひなが場の空氣を余計にきつひなくしてしまつ。決して重苦しいわけではないが、どこか固い空氣だつた。まだ出来つて2日目、お互にのじともよく分かつていない。ましてやせとつはどここの世界の住人かも定かではない。そんな相手に早くも心を許してしまつてゐる自分がここに立つてゐる。過去の経験と辛さ・・・

それらが連なり、そして今の状況がとても楽しく嬉しい。

誰かの温もりがあり、こうして誰かと一緒にいる。  
これが俺の思い描いていた人生なのかも知れない。  
人の温もりを感じ、幸せに生きたい。

「さとり、さん・・・・・・・・

もし、もしもの話だ。

さとりと共に人生を歩んだとすれば?  
まだ出会って間もないが、俺は完全に心を許してしまっているのか  
もしれない。

おかしい、早過ぎると思う人が大多数だと思つ。  
それでも、それでも・・・

「さとりさん!」

俺の叫びに驚くさとり。

そして、こちらを少し見据えるなり顔を赤め俯いてしまう。  
何かを悟ったのだろうか・・・いや、それでもいい。

俺は、一世一代の決断を下す。

「さとりさん、俺は・・・・・あなたがす

時が止まつたような気がした。

まさかこんなことになるとは思わなかつた。

テレビの音なんて既に上の空。

俺は目を見開いたまま動かさない・・・いや、動かせない。

閉じられた綺麗な瞳、ほのかに香る甘い匂い。

ふにつけとした柔らかい感触、生温かい綺麗な唇。

誰がこんな幸せを想像しただろつか。

俺でさえ想像しなかつた。

「ん・・・ふはつ・・・・・・」

まるでここは一次元なのか、そんな風にまで思わされる。  
俺とさとりの口が唾液のアーチを描く。

何が起こった、そして何をした？

さとりとキスをした？それ以外に何をしたというのだ。

「・・・私の気持ちです。あなたが・・・啓祐さんが悪いのですよ・・・」

上田遣いでその言葉は反則だと心の中で叫ぶ。

まさか、まさか会つて2日でこうなると誰が予測した。

ぽつかりと空いていた俺の心に何かが埋まつた、そんな気がした。

空いていた1ピースを埋めるかのように・・・

「私はいつまでもこちらにいるか分かりません・・・けれど、ずっと・・・優しいあなたの傍にいたいです・・・」

遙か上空。

月明かりに照らされたその姿は月下美人。そのまま理解してもらえ  
ればありがたい。

優雅に舞う金髪の女性、夜に似合わぬ口巻をクルクルと回す。

「・・・あなたは大きな嘘をつき、そして大きな過ちを犯している

誰もいない遙か上空で1人呟く。  
田口啓祐の自宅を凝視しながら。

「人間と妖怪の恋など・・・認められないわ」

それは古くからの継。

人間と妖怪が共存する為のパワーバランス。

それが崩される恐れがある。2人の禁断の恋。

「あなたは・・・全てを敵に回すつもりなのかしら・・・それを分かつてているのでしょうか」

女性の表情には美しいという文字は似合わない。  
呆れ、怒り、理解に苦しむという表情。

「幻想郷を潰す者は許さないわ。どんな手を使ってでもあなたを元に戻す。抵抗するならば・・・殺す」

## 第五話 「旅行

あれからと、いつもの、俺の気持ちは浮かれたままだ。  
美佐子の声も口くに耳に入らず、慶一のよろな扱いになつてきたようにも思ひ。

それでもいいかと思つてしまつほど俺の気持ちは高ぶつていた。  
今日の講義が終われば明日から2日間大学に行く必要が無い。  
幸いバイトのシフトも入つておらず、俺はさとりにある提案を持ちかけてみた。

これは昨夜の出来事だ。

「旅行……ですか？」

一冊の雑誌を机に置きさとりに持ちかけてみた。  
季節は5月、6月を通り過ぎて7月。  
海が恋しくなる夏の到来だ。

「こここの旅館の飯が凄く美味しいんだ。夜の眺めも最高だし……  
2人で行こう?」

まるで新婚夫婦のような衝動に揺さぶられる。  
パンフレットには折り田や付箋は無い、まさにこの旅館だけに絞つていたかのようだ。

それもその筈だ。この旅館は去年美佐子と慶一と3人で泊まりに行つた場所。

ご飯も美味しい眺めも最高、そして女将さんの談話も腹が引つくり返るほど楽しい。

これ以上に良い旅館なんてあるわけがないだろうと断言出来るほどだった。

「2人で旅行・・・その・・・私・・・」

顔を赤めながら俯くさとつ。

そんなさとりとは対照的にウキウキ気分の俺がここにいる。パンフレットを丸めて何となくブンブン振つてしまつのはよく分からぬいが。

「・・・・・・啓祐さんとなら・・・はい、行きたいです・・・」

これぞと言わんばかりに舞い上がる俺をじつと凝視するさとつ。無理も無い、こうして異性と旅行に行くなんて誰でも喜ぶことだ。ましてや俺だ。友達以上の人と旅行に行くのは初めてかもしない。いつもはさとりに子どものように言つているが、今だけは俺の方が断然子供のようだった。

「それじゃ明後日から行こう!-予約すぐに入れるからさー!-予約予約!-」

電話の子機を手に取り雑誌に書かれてある番号に掛ける。

電話の主の声は聞き覚えのある声。

受付の人は去年と同じで変わつていらないらしい。

「・・・はい、はい。明後日の頃に・・・はい、はい!-」

少しの確認を交え電話は終わる。

運良く部屋はまだ空いていたらしい。

「楽しみだな・・・楽しみだなおい!-!-」

「そんなにはしゃぐと怪我しますよ・・・」

呆れ顔のさとりだが内心は喜んでいるに違いない。  
俺には読心術なんてものは無いのだが・・・  
さとりにだってあるわけがないだろう。人間に入る心を完全に読む  
なんて不可能なのだから。

「・・・・・」

さとりが唇を固く閉じる。

俺のはしゃぎっぷりに呆れてしまったのだろうか。

流石にはしゃぎ過ぎたと自重し、床に静かに座り込んだ。

そんあことがあつて今は帰りの電車に乗つている。

美佐子と何通かメールのやり取りをし、明日から旅行に行くと云々

た。

”1人？”と聞かれたので”2人”と答えておいた。

”誰？”と聞かれたが”内緒”と答えておいた。

すると”そつか”と素つ氣ない返事とともにメールのやり取りは終わつた。

電車は目的の駅に到着し、俺は足早にホームを出た。

自宅までの道のりがこんなに楽しいと感じたことはあつただろうか。

無い、絶対無い。

「（とりあえず服と日用品と・・・あ、水着買いに行かないとな・・・）」

帰つたらデパートに行こう。

さとりの水着を買わないと・・・  
といつても俺は単なる付添いで、売り場に入るほどの度胸は無いの  
だが・・・  
いや、そもそも入ること自体間違っているのかも知れないな。  
時には根性無しが役立つ時もあるらしい。

「と、家か・・・」

危つゝ通り過ぎた自宅の階段を上る。  
鍵のかかったノブに鍵を差し、ノブを捻る。  
当たり前の動作で開いた扉の中へ声を発する。

「ただいま！」

誰も返事などしてくれないと思つていた  
でも、今は違つた。

「おかえりなさい・・・啓祐さん」

紫髪の少女が出迎えてくれる。  
まさに新婚の夫婦のようだが、これでも出合つてまだ2か月程度し  
か経つていない。

我ながら早くに馴染め、心を開けたと思つ。  
・・・もしかしたらお互に境遇が似ているのかも知れない。

お互に辛い思いをしてきたのがもしかない、だからすぐに心を開くことが出来たのかかもしれない。

「そりそり、海に行くのだから水着買おう?」  
「アパート行こう!」

「み、水着ですか・・・・・・」

そわそわしながらも口クリと頷いてくれるさとり。

そうと決まれば早速出掛ける支度を済ませる。

俺は車のキーを棚から取り出し、免許書と財布をポケットに突っ込んだ。

さとりはそこまで手荷物は無い。

とりあえず外出用の服に着替え・・・・あ、勿論俺は退室。

そしてアパート裏の愛車の下へ直行したのであった。

平日ともあつて人は少ない方だと思つ。

入り口付近に車を止め、少しば見慣れたデパートの中へ足を運ぶ。

同じ4階のファッショントーナーでも場所が違う。

服とは別に、夏になれば繁盛する水着のコーナーへ。

俺はいつものベンチに腰をかけさとりを待つことにした。

隣の自販機で缶コーヒーを買って。

「(・・・俺の水着つてあつたっけか)「

押し入れのどこかに詰め込んだような記憶があるようで無い。  
まあいいだらう、帰つて探せばそれでいい。

今はせとつの水着が決まるのを待つだけだ。

「（やとつせんといえば紫かな・・・でもたまには別の色もいいかな・・・）

俺の脳内で繰り広げられるファッショントリオは変態以外の何者でもなかった。

そんなことを繰り返しながら早30分。

1つの白い紙袋を下げたさとりが戻ってきた。

「良いの決まった？」

「は、はい・・・・・・店員さんのおすすめですが・・・・」

普通ならここで見せてと声をきなのだが、楽しみは後に取つておきたい。

紙袋をまじまじと見つめつつ、駐車場に止めてある愛車の下へ戻ることにした。

日が暮れはじめ、徐々に月明かりが姿を現す時間帯。

ここで俺はつまらないことを思つて。

「晩御飯さ、どこか外で食べない？」

家族連れが集まるファミリーレストラン、略してファミレス。

その一角の席に座る俺とせとつ。

慣れない場所に戸惑つたりとメイドと睨めつける俺。

ファミレスは美佐子と慶一の3人で何度も来たことがある。無論、ドリンクバーと何か軽い物を注文するだけだが・・こうしてご飯として来店するのは初めてかもしない。

「やっぱステーキ辺りがいいよな・・・サーロインか・・・うん、これでいいや」

自分の注文する品を決め、後はさとりを待つだけだ。  
俺以上にメニューと睨めっこを繰り広げるやうだ。相変わらず子供  
のようだ。

俺はそれをじつと、しかし楽しげに見つめていた。

「・・・メ-ユーが多過ぎて決めれません・・・」

さとりが好きそうなもの・・・よく分からぬのが本音だが・・・がつたり系の肉はあまり好きそうじやない、だとすれば軽い食べ物だろうか。

かといつて甘い食へ物つて具体的はなんがる三

結局、さとりは田舎焼きの乗ったハンバーグというものを

・・・・・

・・・・・ サーロインステーキと田玉焼きハンバーグを1つづ

七

「無反応！？流石にアレむだぞ！」

店員なのだからしつかりしようと渴を入れてやりたくなる。ファミレスの制服に身を包んだ慶一がそこにいた。笑いたくなつてしまつ。

「さては彼女か？それとも新づ

俺の物凄い形相に慶一は言葉を詰まらせる。

怖いのか、それともこれ以上いくと後々面倒だからなのか分からな  
いが。

とりあえず注文する品を前に渡す。

「・・・ま、旅行楽しんできなよ。お前にひとつちや初めてのような  
もんだる」

こいつのじつじつとは本当に感謝する。

親友つていいものだ、普段は馬鹿言つてもこざとこつときは助  
け合えるのだから。

「サーロインステーキと玉玉焼きハンバーグね。すぐに持つてくる  
わ」

そつ言つて厨房に入る慶一。

れど今はぽかんとした表情で俺の方を向いている。

「俺の親友の緒方慶一。馬鹿な奴だけど根は良い奴なんだ」

「親友・・・ですか」

さとつの胸にちょっとしたもやもやが溜まる。

そう、この時初めて味わつた感覚。

もやもやが晴れずに溜まつていくような感じ。

初めての”嫉妬”

「セヒリさん、どうした？」

「あ、いえ・・・大丈夫です」

何も無いフリをしているのがバレバレだが、あえてそつとしておこう。

数分して注文した品が運ばれてくる。無論、慶一の手によって。

「俺のお手製料理を召し上がる」

「嘘つけ」

馬鹿の冗談はさっと流し、運ばれてきた料理に舌鼓を打つ。さとりもハンバーグが気に入つたらしく次々に口へ運んでいく。

さあ、帰つたら旅行の準備だ。

綺麗な海に似合わぬ惨劇の旅行へと・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1976ba/>

---

光射す方へ・・・【東方小説】

2012年1月5日23時46分発行